

中学校における家庭科教育実習に関する研究

被服実習の指導と問題点

荻野千鶴子・岩城久美子

Studies on the Teaching Practice in the Subject of Home Economics in Junior High School

The Some Problems in Teaching the Practice the Clothing Construction

Chizuko OGINO and Kumiko IWAKI

緒 言

昭和44年文部省告示により、中学校技術・家庭科学習指導要領が改訂になり、内容が精選されて領域が少なくはなったが、今なお内容の量的なものほか幾多の問題が残されている。前回技術・家庭科（女子向き）指導の現状について、家庭科教師を対象に基本調査を行なったところ、指導内容については6領域のうち被服関係の問題点が非常に多かった。そこで、一方学ぶ側の生徒はこれに対してどのような意識をもっているか、また父母の考え方などを知る目的で実態調査を行なったのでここに報告する。

調 査 方 法

1. 調査対象・調査時期

東海3県（愛知県・岐阜県・三重県）をA市街地・B市街周辺・C避地およびこれに準ずる地域に分け、一応中学校の課程を終えた3年生女子およびその父母を対象として、昭和50年1月にアンケート調査を行なった。

2. 調査方法

- 1) 中学校3年生女子およびその父母に設問項目によるアンケート用紙を配布しこれを回収した。表1のように回収率は何れの地域においても92%以上であった。
- 2) 中学校を訪問して、指導上の問題点について中学校長・家庭科教師およびその他の意見を聴取した。

結果および考察

1. 教科の好嫌度

一般に現代の生徒は技術・家庭科という教科は嫌いだという声を聞くことが多いので、9教科をならべて、それぞれについて、「好き」、「嫌い」、「どちらでもない」の3項目のうち1つを選び○印をつけさせた結果は図1に示す通りである。「好き」と答えたものを多い順に

ならべると、最も好きな教科は音楽で、技術・家庭科は、32.4%で丁度中間に位している。また「嫌い」と答えたものを順にみると音楽とならんで11.0%で最も少ない。この結果からみると嫌いな生徒は非常に少ないことがわかる。これについてのABCの地域差は顕著にはみられなかったが、「嫌い」と答えた生徒は、A13%、B11%で、最も多かったのはC地域の18%である。これらの生徒の原因を追究し改善の方向へとっていききたいものである。

表1 調査数

人数

対象地域	県	生徒			父母		
		A	B	C	A	B	C
愛知	1	40	41	30	31	37	30
	2	40	37	22	39	37	22
岐阜	1	36	60	38	32	53	33
	2		67	28		65	28
三重	1	50	50	47	48	50	47
	2	46		31	46		31
	3			13			13
	4			31			33
計		212	255	240	196	242	237
総計		707			675		
回収率 %		99.53	99.60	99.17	92.01	94.53	97.73

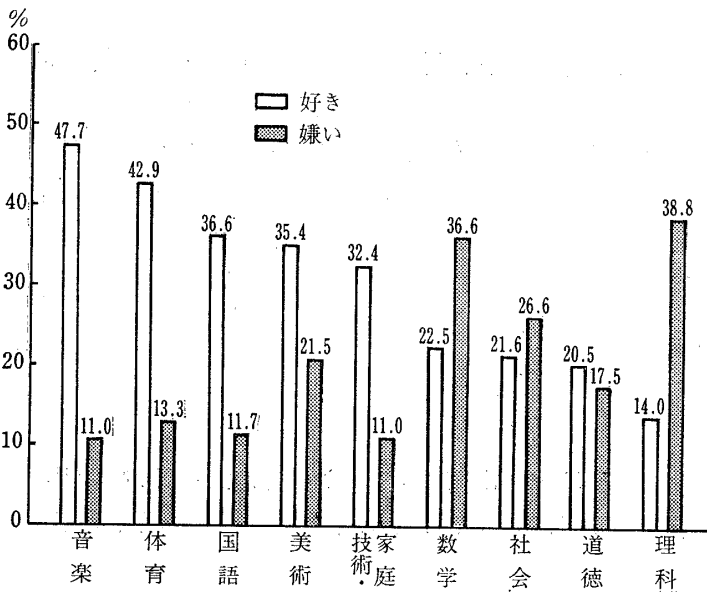


図1 教科の好嫌度

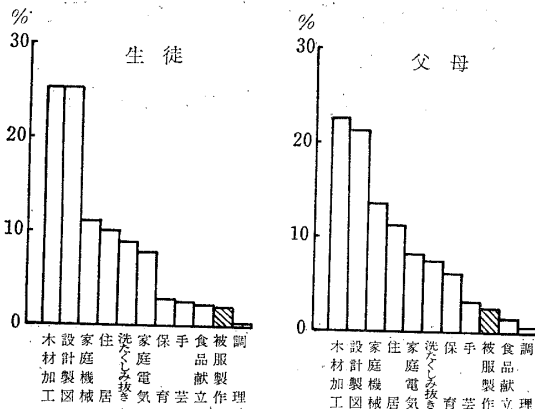


図2 不必要内容

2. 不必要な内容について

生徒、父母ともに女子向き内容を13項目に分けて、必要と思うものから順に番号をつけ、また不必要なものには×印をつけさせた。その結果、図2に示すように、最も必要度の高いものは、生徒父母ともに調理実習をあげ、その必要性を認めている。

つぎに不必要を訴えた内容は、生徒、父母ともに木材加工、設計製図ついで家庭機械である。木材加工については内容過多や時間の都合上実施していない学校もみられ、また実施していても内容については種々であるため、学校差がみられる。被服関係の中でも特に問題の多い被服製作については、生徒では「不必要」は僅か1.8%、父母は2.7%という少数であった。

3. 家庭科内容の好嫌度

つぎに生徒が3年間履習した内容について「好き」なもの、「嫌い」なものをあげさせた。図3に示す通り「好き」な内容として、調理実習は61.0%で群をぬいて多く「被服製作」は僅か17.0%であるが2位を占めている。また「嫌

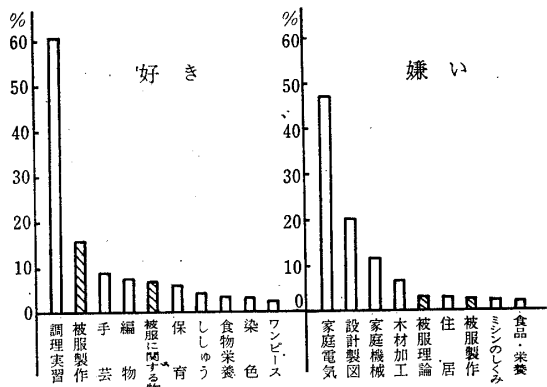


図3 家庭科内容の好嫌度(生徒)

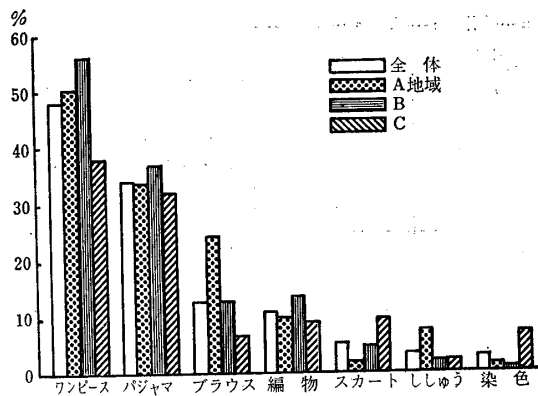


図4 学習してよかったもの

いなものの1位は48.0%の家庭電気で、被服製作および被服に関する理論は、僅か3.5%が「嫌い」だと表現している。

4. 学習してよかった内容

学習してよかった内容について、被服関係の内容をみると図4のように、何れの地域においてもワンピースドレスが最も多い。これはワンピースドレスが3年生の教材であり、技術的にも相当上達をして自分の好みに応じてデザインを考え製作したのでこのような結果が出たと思われる。スカートについてA地域が非常に少ないが、これはA地域中には製作しない学校があったのに原因すると思われる。手芸については、履習する内容が各学校において異なるので、各自が履習したものの中から選んでの解答であるので、ここに現われた数字によって結果を断定することはむずかしい。しかし全体に編物は何れの学校も履習していた。

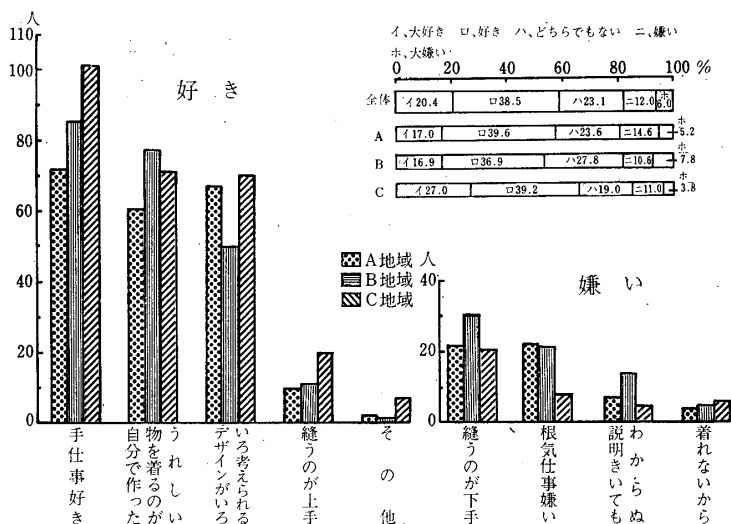


図5 好嫌度および理由(生徒)

5. 被服製作の好嫌度(生徒)と理由

生徒の被服製作の好嫌度については図5に示すように、地域差は殆んどみられなく全体に60%以上は「好き」であり、「嫌い」なものは何れの地域においても20%以下であった。そして「大嫌い」はC地域が最も少なく、多いB地域においても7.8%という少数である。C地域は「大好き」なものが最も多い。

「大好き」な理由としては、「手仕事が好き」が最も多く、ついで

「着るのがうれしい」「デザインが考えられるから」があげられ、創造性を豊かにする教育が徹底してきていることが伺える。

「大嫌い」な理由としては、「下手である」「根気仕事嫌い」が多く、これらの理由は納得がいくが、つぎの「着れない」「説明がわからぬ」は、僅かでも、指導者の責任として一考を要する問題と考えられる。

これらの理由を地域別に見ると手仕事の好きな生徒は都市より離れるほど多くなる傾向にあ

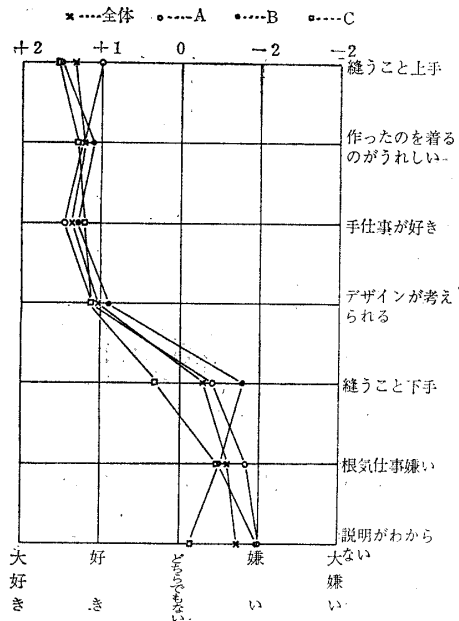


図6 被服製作好嫌の理由項目における尺度(生徒)

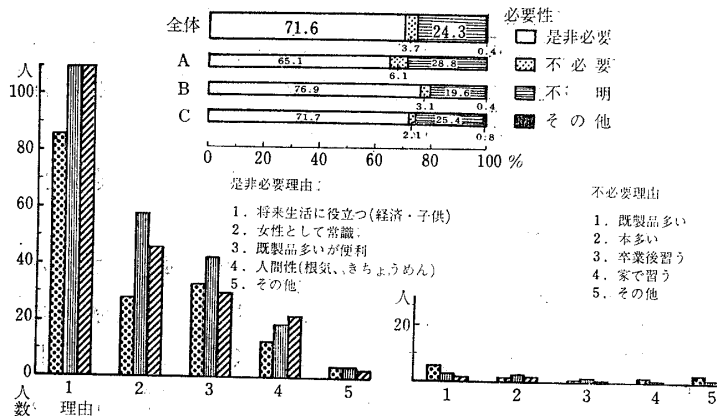


図7 被服製作の必要性および理由

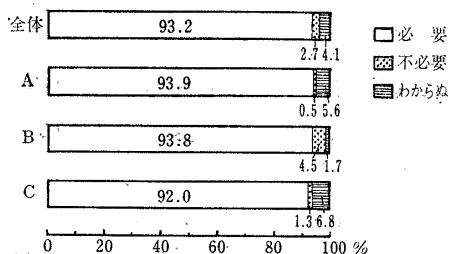


図8 家庭科の必要性(父母)

る。

好嫌の理由項目における尺度をみると(図6)「嫌い」な理由においてC地域では「下手であるが、縫うこと好き」というのが目立ちやや地域的な違いはあるが顕著な差はみられなかった。C地域は他に比べ被服の「大好き」が最も多く「大嫌い」が少ない。また必要性についても全く同じ傾向を示している。

6. 被服製作の必要性と理由(生徒)

技術不要論さえ唱えられている現在、また中学校家庭科教育で最も問題視されている被服製作の必要性についてみると図7のように「是非必要」であるというのが71.6%であるが、「不必要」を訴えるものは僅か3.7%であり、都市から遠ざかるほど不必要性は少なくなり「是非必要」であるというのが多くなる。その理由として、自由記述式であげさせたところ「将来の生活に役立つ経済的、子供のしつけ上からみて」とい

う理由が多く、次いで、「女性の常識として当然である」とか、「既製品多いが便利である」との理由があるかと思えば、他方不必要理由として最も多いのは「既製品が多く出廻っているから」という理由である。しかしその度数は非常に少ない。必要度と好嫌の関係をみると、必要度をもとめているものは好きであるという傾向が現われている。

7. 家庭科の必要性と理由(父母)

つぎに家庭科の必要性についての父母の意見は図8に示す通りである。即ち何れの地域においても90%以上のものがその必要性を認め、その理由としては、「将来生活に役立つ」とか、「思いやりのある人間性の育成」、「人間性が生活に大切であるから」などをあげ、父母としては技術のみでなく技術を通しての人間性の育成を望み、この価値を認めている。

8. 被服製作の程度と方法(父母)

学校長や、現場の家庭科教師の意見を聞くと、被服製作についてはとにかく父母の間で問題が多いと言われるのでこのあたりを究明する必要があると考える。現在の各学年の細目についての程度に対する意見は、図9のようである。都市においては下げるというのが23.2%あり、や

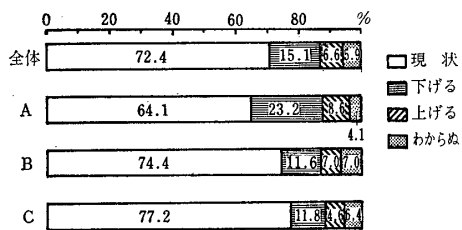


図9 被服製作の程度

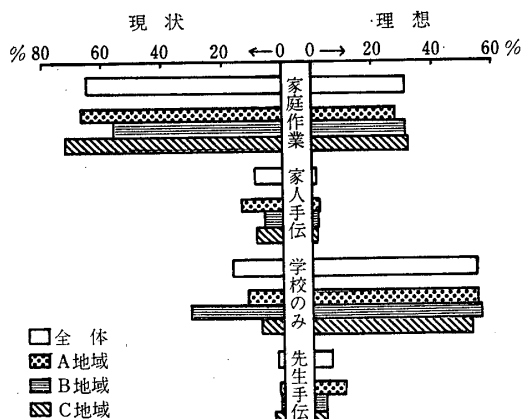


図10 作業の方法

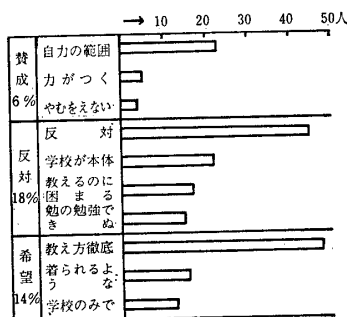


図11-1 宿題に対する意見(父母)

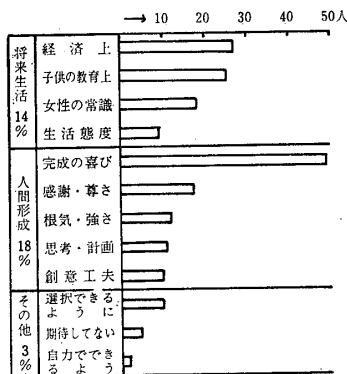


図11-2 被服製作への期待(父母)

や抵抗を感じている様子がわかった。そしてこれらの作業方法については(図10)、学校により教材を学校に預り、持ち帰らせぬようにしている所もある。これを理想と考えてはいるが、実際学校の行事その他に追われ、能力の個人差を補う時間がないためにやむなく家庭作業を行い、その結果、家人の手伝いが相当入っているようである。そのために母の負担が大きくなり

理想としては、学校のみ作業を望むものが何れの地域も半数以上ある。また能力差を補うためには家庭作業も、止むを得ないと認めたり、これらの生徒には教師の手伝いを望んでいる父母もある。現在のように学習指導要領で、ある程度実習細目がきめられた形になっている場合、能力差をどう解決するかは大きな課題であると考えられる。家庭科教師としても現在の時間数に対する内容が過重なため、やむなく家庭での宿題を出しているが、これに対する意見は図11-1のようである。即ち賛成より反対意見が多い。その理由として、高校進学のための勉強のしわよせも見られる。

或は、現在高校入試科目から技術・家庭科がはずされた結果の余波ともみられる。父母の希望として教え方を徹底させてほしいというのが、僅かでもみられたが、実技指導の効果的な方法研究も怠ってはならない課題の1つと考える。また父母の被服製作への期待は(図11-2)

人間形成が最も多くその内容として、「完成の喜びを知らせる」

「物の尊さを知り、感謝の気持ちを植えつける根気のある人間にしたい」「考え、計画性のあるようにする」等、現在の生徒に欠けていると思われる人間性を何とかして技術を通しての定着を期待しているようである。

要 約

以上をまとめると、中学3年生徒は

1. 教科としての技術・家庭科の「好き」「嫌い」については、顕著な地域差はなく、「好き」なものは32.4%、9教科の丁度中央に位し、「嫌い」なものは11.0%で、音楽とならんで最低である。
2. 中学校技術・家庭科(女子向き)の内容中、「不必要」を訴えるものの最高は木材加工、

最低は調理実習、ついで被服製作で、その必要度は、調査人数中、生徒は約6%、父母は、約8%である。

3. 被服製作のうち、学習してよかった教材としては、ワンピースドレスが最も多く全体の約半数を占め、ついでパジャマであり、スカートは、僅か5%程度である。

4. 被服製作については半数以上のものが「好き」であるが、「嫌い」な理由としては、「説明聞いてもわからない」「着れないから」というのが僅かながらある。

つぎに父母の意見としては

1. 家庭科の学校教育としての必要性を全体の93.2%のものが認めており、「不必要」と答えたものは僅か2.7%不足である。

2. 必要性を認めた理由は、「将来の生活のため」「人間性育成」などがあげられている。

3. 現在の被服製作の程度は、「現状のままでよい」というのが72.4%以上あるが、「程度を上げてほしい」というよりむしろ「下げてほしい」との意見の方が多い。また作業方法も、生徒の能力の個人差を充分認め、家庭作業は「やむを得ない」とするもの約30%であるが、半数の人は「学校のみ作業」を望み、遅れたものへは、「先生の手伝い」も希望している。

現在次期学習指導要領の改訂準備の時期でもあり、社会の世論も大切であるが、実際にこれを学ぶ生徒の意識と合わせて父母の考えも知り、現代社会における義務教育の最終段階の家庭科教育のあり方について研究し、大学教師も、中学校の実態を充分把握した上で教育実習の事前指導を行ない実習の効果をあげたいと考える。

終わりに、本調査に御協力くださった東海3県下の中学校3年女生徒および、その父母ならびに家庭科の先生方に厚く感謝します。

参 考 文 献

荻野千鶴子：名古屋女子大学紀要，20，p. 141—147（1974）